

スペースヒーローお茶子見参！

足田

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、その男は麗日お茶子に憑依した。

そいつはヒーローに憧れていなかったたので、別の道を目指す事にした。

その道はまっすぐ天へ昇る道。軌道エレベーター建築という道である。

※お茶子の個性で親孝行しようとする一発ネタ

※何だかんだ雄英には入ります

目次

第1話	お茶子転生	1
第2話	特訓回	7
第3話	雄英高校入学試験	10
第4話	入学く個性把握テスト	19
第5話	ヒーロー基礎学：戦闘訓練	28

第1話 お茶子転生

突然だがヒロアカの麗日お茶子になったようだ。

「はあ、こんな事ほんまに起きるんやに……」

鏡を覗ながら自然と出た言葉が何故か関西弁に。チャキチャキの江戸っ子である俺の口から出るにしては、イントネーションがそれっぽ過ぎる。

「お茶子ー！ いつまで寝とるの！ 学校に遅れるに！」

「はいはいー！」

体が自然に反応し、俺は元気よく返事をした。リビングに行けば母がかましくご飯をかつこむように促すだろうし、父はマイペースに新聞の競馬欄でも見ているだろう。

何の違和感も無く想像された光景。それを下に降りた俺が寸分の狂いも無く実際に体験した事で、俺は俺であると同時にすっかり麗日お茶子でもあると認識した。

ランドセルを背負い、玄関を出る。小学校に向かう道に、桜吹雪が舞っている。

ちらちら舞い散る花びらを見ながら思う。

ノンケがメインヒロインにTSってどういう層に得があるんだろうか、と。

*

麗日お茶子はヒーローになりたかったようである。

13号とかいうヒーローが特に好きで、彼（彼女？）のように皆を助けるヒーローになりたかったようである。

そしてそれとは別に、零細企業を切り盛りする両親を助けたいとも思っている。

重力を遮断するという個性持ちなので、建築業を営む両親の会社に入れば確実に助けになるのだが、ヒーローになる夢を捨てるなど言われて、その通りにしようとしている。

だから稼げるヒーローになって両親を助けようと考えていたのだ。
が。

そこに俺という意識が入ってくる。現代日本に生きた俺には、ヒーローになりたいなんて思いは無い。

お茶子が高給取りなヒーローになれると確約されてるなら考えてもいいんだが、俺の知っている範囲でそんな気配は無し。大円満でエンディングを向かえた場合に、No1ヒーロー夫人として両親を援助出来るようになれば御の字で、普通に考えればそこそこの給料で健気に働く社畜となるだろう。

俺は常識的な感性を持った人間だ。コスプレしながら跳ね回る狂人を演じるのに、薄給ではやってられない。

という訳で将来設計を早々に見直そうとしたんだが、お茶子の意識がヤダヤダヒーローになる！ と五月蠅い。

相手は小学生の女の子なので理性的な対話が出来るはずも無く、深層意識の説得には物凄い時間が掛かった。

(あのなー、このまま行っても自己満だけで親孝行出来ないぞ？ それなら別の道に行く方が良くないか？)

(でも父ちゃんに約束したから！ ヒーローになってハワイに連れてくって！)

(別にヒーローじゃなくても連れてけるだろハワイ)

(でもヒーローになりたい！)

(俺がヤダ)

(ヤダっていい年して何子供っぽい事言つとるのこのおっちゃんは！)

(おっちゃんじゃねえ！ まだアラサーだ！)

(何それ)

(……あれ、まだ死語じゃないよな？ 気付かず死語使うようなおっちゃんじゃないよな俺？ ギリギリでもお兄さんだよな!?)

(そんな事考えちゃう時点でおっちゃんなんやろ)

(畜生！)

……このように理性的で無い輩の相手をするというのは時間をド

ブに捨てるものなのだ。

(なに言つとるのおっちゃん。理性的ちやうのはおっちゃんの方やんか)

だからおっちゃんじゃねえって言ってるだろうが！

……閑話休題、俺は大人の余裕を見せる事で、深層意識でグダグダ言っている女の子を説得する事が出来た。その戦いは長かったが、彼女の叶えたい部分をしっかりと取り入れる事で、妥協するに至ったのだ。

(つまりな？ お茶子は人を助けたい。ついでにお金も稼いで親も助けたい。そんな感じでヒーロー目指しているんだろ？)

(うんうん)

(それは別にヴィランを殴り飛ばしたいって事じゃないんだろ？ 1
3号に憧れてるくらいだし)

(そうやに)

(ならヒーローじゃなくても人が助ければ良いって事だよな)

(まあそうやけど……)

(普通にヒーローやるよりも多くの人を助けれるぞ。なんたって対象は全人類だ。しかも一回成功させれば少なくとも100年は感謝され続けるぞ。勿論金もガッツポガッツポ)

(おっちゃん……夢見過ぎちやうん?)

(おいガキンチョその哀れみの感情止めろ。こっちはしっかりとプランがあるんだプランが)

俺が前世？ でお茶子の個性を知った時から、これなら他の仕事をしたほうがいいのではと思っていた。

確かに災害救助の現場でも重宝されるのだろうが、産業分野に突っ込んだ方が良い能力だし、科学分野に突っ込めば冗談抜きでノーベル賞級の発展に寄与出来るだろう。

だがその中でも人類史に残り、かつ金になる行動がある。それは、

(軌道エレベーターを作る)

(きどーえれべーたー?)

そう、軌道エレベーターの建築だ。

地上から乗るだけで宇宙に行ける夢のエレベーター。それをこの世界に打ち立てようって訳だ。

何故そんな物を作ろうと人類が考えたのか。それは地球という揺りかごから宇宙に飛び出すのに、ロケットを使うだけでは金が幾らあっても足りないからである。

ロケットの打ち上げは1回100億円オーダだ。しかも再使用するタイプは維持費が余計に掛かるという事で、使い切りタイプのロケットが主流になっている。

つまり一度宇宙に行くだけで毎度毎度100億円がすつ飛んでいく訳で、地球を飛び出す事の難しさをこれだけ簡単に表す物もないだろう。

それが軌道エレベーターになると話が変わる。

エレベーターというくらいだから幾らでも上り下りが出来る。その昇降回数が増える毎に1回当たりの使用コストが下がるので、最終的には新幹線に乗って旅行に行くくらい簡単に宇宙に行けるようになるだろう。

これだけだとSFな話だ。しかしまるつきり実現不能という訳ではなく、現実世界でも建材の目処は立ち始めていたくらい、実現性の高い計画である。

だが勿論実際に作るには多数の大きな問題を抱えていて、建築が始まるのは早くて半世紀後という有様だった。

その中でも一番の理由が、建築コストがべらぼうに高い事である。何しろエレベーターの長さが約4万キロと、地球の直径の3倍の長さが必要になる。そんな馬鹿でかいものを作れば勿論建築コストも阿呆みたいになるわけで、楽観的な試算でも1兆円は下らないという話だ。

そしてその大部分は、宇宙開発最大の敵・重力に打ち勝つための費用である。

先に説明した通り、宇宙開発に掛かるコストは打ち上げコストが大部分を占める。重力加速度 9.8 m/s 。この数値を振り切るために、ロケットは膨大な燃料を燃やして運動エネルギーを得なければな

らない。

その結果、1kgの物体を500km^{低軌道}先に上げるだけでも100万円というお金が掛かる。

一昔前に言われた重さあたりが金と同じ値段、という状況よりは多しリーズナブルになっているが、水平方向での移動に例えるなら、牛乳パック1本を東京から大阪に届ける、たったそれだけの事にこれだけ掛かるのだ。

故にSFだと思われ、手が付けられていない。少し手を伸ばせば掴み取れる未来だというのに。

俺がまともに生きている間に拝めるかどうかもう危うい話だった。前世の俺はそれが歯痒く、何故もつと未来に生まれなかつたんだと思つたくらいだ。

だが転生だか憑依だかしたおかげで、その話がガラツと変わる。俺の憑依先のお茶子という女の子は、重力を問答無用で打ち消せる存在だからだ。

勿論ロケットのスペース的な問題で1回に打ち上げられる量に制限は掛かるだろうが、今の時点でも3t分は浮かせれる。

現実の日本のロケット H-II Bの打ち上げで例えるなら低軌道で15%、静止軌道で40%程の貨物の重さを0に出来るのだ。

それを知つた宇宙関係者は三顧の礼を持って俺を招聘するだろう。少ない予算をやりくりしている所に、億円単位でコスト削減出来る存在がやってくるんだから。これが冷戦時代なら、俺を巡って米ソが誘拐合戦を繰り広げたに違いない。

だからまず宇宙産業で打ち上げ補助の仕事をする。交渉次第だが、打ち上げ一発億円単位のお仕事に出来る。それはもうアホみたいに稼げるだろう。

そしてその金を両親の会社に突っ込み、会社を拡大させ、来るべき軌道エレベーター建設の礎とするのだ！

(おっちゃん夢見過ぎ)

(おっちゃんちやうちやう！)

……とまあこのように感じで将来が決まった。

勿論その後にお茶子の文句が無くなる事はなかったが、みんなのためになるって事には変わらんし、個性強化と資格の利便性を考えてヒーローになつとくのもいいんじゃないか、という妥協案を出す事で落ち着いたのだ。

まあ一番の理由としては、これ達成すれば13号と同じくスペースヒーロー名乗ってもいいんじゃないかって言ったせいな気がしなくもないが。

第2話 特訓回

そうと決まれば早速特訓回だ。

恐らく2話目くらいにしてさっそく水増し行為を行うなど元読者としても非常に心苦しく思う。

だが、個性が強くならないとどうしようも無いからどうか我慢して欲しい。ダイジェストにするからホントマジで堪忍な。

(おっちゃん誰と話しとるの?)

(恐らく見ているだろう読者か視聴者向けの説明)

(なに言つとるのこのおっちゃん)

ヒーローは数多くいるが、俺ちゃん的なヒーローに理解の無い世界のような。世知辛い。

閑話休題、今必要な能力は、兎にも角にも持続性である。ロケット打ち上げの途中で効果が切れたら、その瞬間に空中分解必至だろう。最低でも30分。欲を言えば1時間は効果が持続するようにしたい。

そしてもう一つは効果範囲だ。単なるヒーローやるなら自分から離れると効果が切れる、みたいな内容でもそう不便は無いだろうが、宇宙開発するとなるとそうは言えない。最低でも500km、最終的には4万kmという距離が離れても効果が切れないようにしなければならぬ。

まあどちらでも劇中ではつきり効果が何分で範囲は何メートルまで、なんて言われてはいない。言及されていないなら幾らでも後付出来るのが創作の世界だ。

特に俺の意識が存在する時点で二次創作的な世界だろうし(まさかスピンオフじゃなからう)、メアリー・スーっぽくなるのも不可能じゃないだろう。鬱展開好きの作者じゃなければの話だが。

一応第一目標として雄英高校に入る事は決めている。

色々面倒はあるだろうが、やはりJAXAやNASAに売り込み掛けるにしてもネームバリューはあった方がいいだろうし、あと単純に個性鍛える場所としても、あそこ以上の設備はそうそう無いだろうからだ。色々面倒はあるだろうけど。

という訳でカラテ……じゃない個性あるのみだ。とりあえず登校前に庭の石を浮かせ、帰宅までしつかり浮いているかを確かめてみる。

そわそわしながら授業を受け、帰ってみればそこにはしつかりと浮いている石の姿が！

(やったやんおっちゃん！ この調子でパワーアップやに！)

(おおやったるでえええ！ おっちゃんやったるでえええ！)

翌日、調子に乗った俺が工事現場の鉄筋を浮かせた所、見事にゲロインになった。H形鋼10本を浮かせるのは流石に無謀だったようである。

だがとにかく半日くらいは物を浮かせて、さらに設定通り3tまではペナルティ無しで持ち上げられる事も分かったのだ。しかもゲロの原因は三半規管の混乱が原因の宇宙酔いっぽいもの。単なる酔いなら克服する事など幾らでも可能だ。原作でもやってたし。

という訳でミツシヨン2である。ゲロ吐き気絶する寸前まで物を浮かせて維持するの巻。

これは正直キツかった。まずまっすぐ歩けないから色んな種類の事故に遭いそうになるし、他人の話している言葉が耳に入らない。ちよつと口を開けば即りバス出来そうなので、自然と口数が少なくなる。

吐き気だけでこれなのに、いずれ来る生理とやらはどれだけ地獄になるんだろうか。男の俺としては戦慄を禁じ得ない。

周囲に心配されながらも、俺は特訓を継続する。目論見は的中したようで、浮かせる量も少しずつだが増えていった。

代わりにちよつと毛色の違う病弱キャラ扱いになった気もするが、そこは仕方ないだろう。

もとより女子グループに入るのはおっちゃんの難易度が高い。

ぷり○あがんばえく！ と前世でやっていたなら混ざれたんだろうが、残念ながらオタク度はにわか程度でしか無かった。

勝手に付けられたキャラに乗っかって儂げに微笑む事で、よく分からない女子社会の荒波を避けれるなら、いくらでもそのキャラを演じ

第3話 雄英高校入学試験

さて雄英に入るに辺り、問題が幾つかある。

その中でも最大のもものは、原作通りに動くか動かないかというものだ。

具体的には――

「大丈夫か？」

「わっ、え!？」

倒れかけた緑谷の体勢を立て直し、地面に立たせる。キョトンとしている彼に微笑み、原作通り――なつもりで声を掛けた。

「勝手に悪いな。でも試験前に転ぶとか縁起悪いし」

意味合いは確かこんな感じだったはずだ。緊張するなどか何とか言って、俺はまだフリーズしている緑谷と別れた。

離れる。チラリと後ろを見る。緑谷はまだホゲーとしている。そして緊張から解放された途端、変な声を上げ始める。

うん、俺も何でも無いようにやったけどもさ……

(細かい部分覚えてないからもうままよって感じでやったけど原作こんな男口調じゃねえし！ これホント大丈夫だろうなあ!?)

(諦めた方がいいと思うよー)

深層意識が駄目出しをする。だがそれに構う余裕も無い。

原作通りにやると言っても、前世の俺は普通に単行本で楽しんだ程度で、単語の一語一語まで覚え込んだ訳じゃない。加えて読んだのも今となっては10年以上前になる。大筋は流石に覚えているが、細かい台詞に日常回とかそこらは全然覚えていない。

そしてお茶子の中身は俺だ。どう頑張っても俺なのである。女の子っぽくなるうとしてみましたが、ヒーローになるための鍛錬もやるのに女の子らしさを磨くタイミングなどあるものか。

(3日坊主だったよねその女の子っぽくなる努力は)

(うるせー！ 別に俺っ娘だろうと実害は無いだが！ ヒーローのキャラ付けだ！)

最初は一人称私で頑張ってたのだが、ふとした拍子に素の俺が出て

しまう。その度に言い直したりしてはいたんだが、

『お茶子、自分の事は好きに呼んだらええ』

と両親に言われてもう俺で押し通す事にした。

どうもトランスジェンダーのように思われたようだが、まあ間違っていないので訂正していい。特に狼狽されたりしていいなし、本当に良い両親だ。絶対孝行しよう。

かくしてメインヒロイン俺っ娘化。もう原作通りもクソも無い。だがそれでも大筋は、大筋だけは原作をなぞろうと思っっている。

(それにしても、あの地味な感じの子と私がねえ)

深層意識が興味深そうにこぼす。

(ん？ もう惚れたんか?)

(……おっちゃん関西弁っていつになっても似非っぽいよね)

(ほっとけ！)

三重県民に似非関西弁言うたら戦争やぞ！ いらきをいばらぎ言うみたいなものぞ！

(……それワザとじゃないなら凄いいよね)

すっかり標準語を使いこなせるようになった深層意識ちゃんに生意気言われながら、俺は入試会場内に入った。

さて、プレゼントマイクがなんか言っている内に、今後の予定を再確認しよう。

入試自体は何の問題も無い。天才の頭脳を持っている訳では無いが筆記は前世ブーストのおかげで余裕だし、実技の方も個性を超強化している。

更に自分はメインヒロイン様だ。例えわざとハマをしようとして、なにかしらの補正が効く気がしなくもない。

問題は、緑谷をどうするかである。

これが全くの別人として生まれたり憑依したりしているのであれば、何も考えずに入試をパスすればいいだろう。

だが俺は麗日お茶子だ。もっと言うなら緑谷が入試をパスするための課題だ。俺がハマして緑谷がカバーする事で、始めて彼は雄英の門を叩けるのだ。

しかし悲しいかな、今日の俺はハマしそうに無い。

開始何分何秒でOPロボが現れ暴れるかは分からないが、現れると分かっていれば警戒出来るし、降ってくる岩なんざ幾らでも避ける事が出来る。

原作と同じ状況に陥るには、わざとそうする他にないのだ。

一応今のところ、彼には英雄に入ってもらおう予定ではある。単純に主人公だし、OFA持っているし。あの力無しでヴィラン連合とやりあうのはあまりよろしく無いだろう。負けないにしろ犠牲者が出るとかそんな感じに変わりそうだ。

なので一応はハマする事には文句は無い。文句は無いんだが……

(おっちゃんおっちゃん、おっちゃんが出久君に恋したら異性愛になるのかな？ 同性愛になるのかな？)

(知るかバカ……)

問題は物語の強制力つてのがあった場合、俺が緑谷に恋心を抱いてしまわないかという事だ。

いや無理。マジ無理。同性愛については何か言うつもりは無いが、自分がその対象となるのはマジごめんなさいなんです……

現状が多重人格障害気味のトランスジェンダーだろうと、心はノンケのつもりなんです……

ただ心に従うとそれは外面が百合になっちゃう訳でそれはそれで中々に難易度が高いのではとか思わなくもないという……

(恋する乙女は大変だね！)

(他人事のように言いやがってこんガキヤ……！)

もう何年も我慢しているが、そろそろ一発殴ってもいいかもしれない。お金に余裕が出来たら鏡を思い切り殴ってみよう。サイコさんだ。

ともかく、最初は原作通りに動こう。恋愛関係はもうなるようにしかならない。万が一惚れたとしても、その後は惚れているのが正常な状態になるんだ。拘る必要は無い。無いんだ。無いんだよ……！

葛藤する俺をよそに、試験開始の時間が刻々と迫る。目を閉じて胸を叩いていると、緑谷と委員長飯田が言い争う声が聞こえた。そろそ

る開始かな。

『ハイスターター!』

プレゼントマイクの声が響く。俺は目を開くとすぐに自分を無重量化。地面を思い切り蹴って会場のビルまで飛んで行く。

ゲロは吐かない。訓練で常時ゲロイン5秒前をやっているうちに、自身の無重量化にも耐性が出来ていたのだ。

嬉しい誤算を有効活用しつつ、適当なところで力を切り屋上に着地。敵がウジャウジャ湧いてそうな辺りまでまた跳ぶ。

この辺りで『賽は投げられてんぞ!?!』という声が聞こえた。フリーズしている連中もそろそろいらっしやるだろう。

まあ、しかし――

「別に粗方喰ってしまっても構わんだろう?」

とカツコいいポーズをしながら周りの敵を空に打ち上げる。点数稼ぎとフラグ立てを同時にやる高度な技だ。ある程度まで倒したら自重するが、たまにはこういうムーブをするのも悪くはない。

(ヒーローやる気ないとか言ってたのに凄い生き生きしてない!?)

(人助けとかはあんま興味無い。が、暴れるのは嫌いでは無い)

いくつになっても男子は刀を振り回すのが好きなのである。俺は刀よか銃派だけど。ヒーローになってからもガン・フーやっていいんだろうか。オーバーキルしちゃうか。

ともあれ試験は順調に推移し、俺も合格ライン分の点数は稼いだ。後は適当に流して、緑谷と合流し、助けて貰って終了である。

(緑谷はどお〜こだあ〜つと)

(男漁りにせいが出るね!)

(お前なんかこうキャラが全然違くなったよなホント)

俺が混ざったせいだっけのは分かるが、深層意識の感じが原作と乖離し過ぎている気がする。

矯正すべきかこのままでいいか悩んでいると、残り時間1分ちよつとという所でようやく緑谷を発見した。やはり1体もロボットを倒していないらしく、焦りながら周りを見回している。

落ち着けと思わなくも無いが、同じ状況に置かれたらどんだけ焦る

事か。まあもうちよつとの辛抱だと思いなながら、その時を待つ。

轟音が響き、ビルが崩れる。青空をバックに、巨人が立ち上がる。

お邪魔虫が起動したようだ。周りの受験生が蜘蛛の子を散らすように逃げ始め、緑谷も腰を抜かしている。

ロボットが腕を振るい、地面に大穴を開けた。瓦礫が飛び、俺目掛けて——目掛けて——

(来ないっ!!)

(運が良かったね)

なわけあるかアホウ！ と叫びたい欲求を押さえ込み、代わりに下敷きにしてくれそうな瓦礫を探した。だが重力はしつかりと仕事を果たしていて、既に飛来物は地面にタツチダウンしていた後だった。

このままでは緑谷まさかの不合格だ。なんとか、なんとかしないといけないが……！

(わざと転べば?)

(……それしかないよなあ……)

それまでこれでもかと立体機動かましていた人間が転ぶものなのか。そんな風にもしかしたら試験官に見咎められるかもしれない。まあパニック状態だったのでと言い訳するしかないだろう。

緑谷近くの適当な瓦礫を探し、自然に見えるように転ぶ。「イターイタスケター」と棒にならないように声を出し、さりげなく緑谷の方を見た。

跳んでた。

人が空に浮かぶと、あんなに小さく見えるんだなと、今更ながら気付かされた。

その小さな粒が、何十倍も大きな鉄の塊を殴り付ける。衝撃波が走り、巨体がひしゃげる。ダビデとゴリアテどころじゃないジャイアント・キリング。

「おお、かつけーじゃん」

思わず声を出してしまった。

体を揺るがす大音響に、舞い散る火花。極上の特等席で見せられたそれは、そう唸るに値するものだった。

彼の合格はこれで揺るぎなくなっただろう。

巨体を粉々にし、ゆつくりと落ちてきた緑谷に、俺は心の中で万雷の拍手を送った。

さておき、このままでは彼が地面の染みとなってしまうだろう。殴って落下速度を相殺しようとしているみたいだが、重力とはそんな甘いもんじゃない。例えば正中線を外さずに打ち抜いたとしても、反動で体がバラバラになるはずだ。

なのでメインヒロインが直々にお出迎えして進ぜよう。

(ノリノリだ)

(黙れい)

再び自身を無重量化し、緑谷を真似て宙に飛び出す。劇中だと彼を叩いていたが、流石にここまで頑張ったのに叩くのはダメだろう。

という事で俺は落ちてくる緑谷の手を取った。驚いている彼を無重量化してゆつくりと地面に下ろし、

「助けてくれてありがとうな。それと『終了了おおおうっ!!!』」

プレゼントマイクの声が響き渡った。合格おめでどうという俺の声は掻き消されたのだろう、緑谷少年の目から滝のように涙が流れ、ガツクリと地面に臥せてしまった。

うーん、この後の結果を知ってはいるが、中々に居心地の悪い状況だな。

とりあえず助けを呼んでくると緑谷少年に伝え、俺はリカバリーガールを探し始める。ハリボー配りのおばあちゃんはそう遠くない場所に居たので、腕とかバキバキに折れてるからとトリアージで黄色だからと緑谷少年の所に案内した。

「やれやれ、老人をそう急かすもんじゃないよ」

と、呆れたように首を振るリカバリーガールだったが、次の瞬間緑谷少年に「チュク！」とシャウトしながらキスをした。

治療行為なのだが、唇が伸びたその様は吸血中の蚊にしか見えな。遊星からの物体○だとか寄○獣ばりの人体変化を実写でやられて、在学中なるだけ彼女のお世話にならないようにしようと思心に決める。

とにかく、これにて試験は終了だ。後はお家に帰って結果を待てば良い。

プレゼントマイクにポイントを分けられませんか、と申し入れた後、俺は意気揚々と地元へと戻っていった。

*

「合格おめでとう」、ねえ」

動画を確認し終えて、プレゼントマイクが背もたれに思い切り身を預ける。

雄英高校の職員室。その業務用PCに映されているのは緑谷出久がエグゼキューターを張り倒した場面だった。その後麗日お茶子が彼を支え、地面へと凱旋した映画のようなシーンである。

リアルタイムでそれを見た時は、思わずYAEH! と言ってしまった。だがそのシーンを見直した今、これはまずいのではないかと思う。

「何を見ている?」

「……相澤か。いや何、今回の入試のハイライトを見ていただけさ」

背後から覗き込んできたイレイザーヘッドこと相澤に対して、マイクは気のない返事をした。

だがそれで引くようならそもそも声を掛けてくるような男ではない。無言でしらばつくれるなど圧力を掛けられ、マイクは盛大にため息を吐いた。

「まだ誰にも言うんじゃないぞ。この麗日お茶子って奴が、事前に試験内容を手に入れていた可能性がある」

「続ける」

「それでもってお前も目を付けていたアイツを手助けした節がある。まあそれがカンニング扱いになるかどうかは微妙なところだが」

連携プレイはヒーローの力の一つだしな、とマイクはおちやらけて見せたが、相澤の顔は瞬き一つ返さない。

「その根拠は何だ」

「違和感。今のところそれだけだな」

自分で言った通り、現時点では違和感以外に何の証拠も無い。

そもそもは麗日お茶子が緑谷出久にポイントをつけて欲しいと言いに来た事から始まる。それ自体は救助ポイントを入れるに値する話だ。

しかし二人の間にどんなやり取りがあったか気になって、試験中の録画を確認したのだが、緑谷出久が麗日お茶子に向かってポイントが足りないと言っているシーンをどうしても見付ける事が出来なかったのだ。

勿論カメラの角度の問題で、そのシーンが映らなかっただけかもしれない。しかしそもそも麗日と緑谷が一緒にいたのは、試験最後の60秒間のみ。秒単位で調べてみたが、彼らが一緒にいる間に、カメラに映らぬ時間は無かった。

そして調べる内に、今度は麗日が転倒するシーンに違和感を持った訳だ。

試験開始時の大跳躍に加え、壁走りまでしてみせる個性を十全に使った機動力。それを散々見せつけたあの子供が、たかが瓦礫に蹴躓くか？ そうマイクに思わせる程度に、麗日お茶子は暴れまわっていたのである。

何しろ敵Pが56と、爆豪に続く撃破数を誇っている。マイクが疑いの目を向けても仕方ないだろう。

プレゼントマイクの不意打ちのようなスタート合図に反応出来たのも担当した中では彼女だけ。担当した1000人の内あそこまで早く動けたのは彼女一人だけだ。

こうなると全てが怪しく思える。

だがマイクが簡単に調べた範囲では、麗日お茶子と緑谷出久が関係を持ったという事実は無かった。

怪しい付き合いがあるとするならば、へんに陸上自衛隊隊員との交友が多いくらいか。その中にはレンジャーきしやう徽章持ちもいる。鳥の異形型個性など飛行出来る隊員ばかりを集めた第一空挺団特殊中隊元隊員までいた日には、一体どこの工作員を育て上げる気だとマイクの

頭を悩ませた。

だがそれだけと言えばそれだけだ。関係者は自分達よりも思想的によつぽど管理されている公務員で危険性は無いし、関係の希少度で言えばオールマイトと個人的関係を持つ緑谷の方が数段上である。だから現時点では違和感、としか言いようが無い。

「そうだな。随分と陰謀論地味なイチャモンだ」

遠慮なくこき下ろす相澤に、マイクは苦笑するしかなかった。

「これがイエロージャーナリズムすれすれだって事は分かっているさ。だから胸の内に留めておいてくれて言ったんだ。だが出来るんだったら……」

「……元々緑谷の事は考えていたからな。分かった、コイツらの事は注視しておこう」

「おお、頼もしいねえ。イレイザーヘッドが注視するなら安心だ」

茶化すように言いはしたが、この件を任せるなら彼らの担任になる相澤以上に適任はいないだろうし、このまま放り投げちまおう。

そんな風に思ったマイクの心を見透かしたように相澤がボソリと言った。

「貸し一つな」

「奢り一回くらいの軽い奴で頼むぜ」

「ダメだ」

「コイツはシヴィーぜ……」

第4話 入学く個性把握テスト

求む英雄。至難の旅、わずかな報酬、絶えざる危険、生還の保証はなし……

だが成功の暁には、名誉と賞賛を得る。

そういう文句に釣られて落ちる虎の穴。UとAの合わさった校章を前に、俺は仁王立ちしていた。

一步踏み出せば物語が始まる。未完の物語が動き出す。希望と絶望に満ちた学園生活が

(おっちゃん、気持ち悪いモノログ入れてないで早く教室行かないと遅刻するよ?)

キモいとか言うな。女子高生にそれ言われるとおっちゃんのガラスのハートが

(はいはい進む進むー)

深層意識に急かされ、俺は仕方なく第一歩を踏み出す事にした。

だがこれだけは譲れないぞと、口に出す。

「これは一人の人間にとっては小さな一歩だが」

ランディング。足が雄英の土を踏み締めた。

「人類にとっては偉大な飛躍である」

(おっちゃん……)

深層意識の呆れた感情は無視する。後で書く自伝のために少しでもネタを増やさねばならんのだ。

*

やる事やったので教室に向かう。劇中のお茶子も最後に教室にやってきたが、似たような事をやってたんだろうか。

(私はそんな事しないって)

ええ〜? ほんとにござるかあ〜? と煽っているうちに、教室に到着した。

「君を見誤っていたよ! 悔しいが君の方が上手だったようだ!」

飯田が緑谷に挨拶しているシーンだった。原作的にもちょうど良いタイミングに着いたようだ。

ええつと、なんて言っただけで挨拶してたんだけか……
思い出せない。いいやもう。

「ようモサモサ！ 合格出来たんだな良かった！」

絶対こんなんじゃないやなかったという思いは宇宙にかつ飛ばそう。予定外の奴が死ぬとかそうならなければ後は野となれ山となれだ。

「パンチ凄かったもんな。そりや受かるか当然」

「いやっあのっ、あなたの直談判のおかげで……ぼくはその……」

真っ赤になった緑谷が顔を隠しながら鼻の下を伸ばしている。

うん……対象が俺じゃなければ青春だなあとニヤニヤ出来るんだけども……

「おつと、もうそろそろ始業だな。じゃあ席に座ろうぜ」

という事で緑谷には悪いがさっさと切り上げる。肩くらいは叩いてやって、自分の席を探す。

見回して、ああ、本当にヒロアカの世界に来ちゃったんだなあ実感した。

才能と希望を抱いた英雄の卵達。漫画で見たあのキャラ達が、立体になって目の前に存在する。

しかもその仲間となって3年間一緒に学ぶのだ。ヒーロー自体をやる気はそんなに無くても、これは流石にワクワクするだろう。

(有名人にあったミーハーな人だ)

何か言ってくるのを無視して、席に向かう。どうやら一番後ろの席のようだ。麗日なんて名前だから出席番号順だとまず後ろにいない。変なところで新鮮味を感じさせてくれるなヒーロー科は。

「ふむ、最初から全員席に座っているか。君達はそこそこに合理的なようだね」

席に座り、お隣さんに挨拶しようとした所で、寝起き感満載のお声が掛かった。前を向くと、そこには巨大な芋虫がいた。

「担任の相澤消太だ。よろしくね」

抹消ヒーロー イレイザーヘッド。不健康感丸出しの顔で、そう自

己紹介をしてきた。

「早速だが、体操テイクを着てグラウンドに出ろ」

と、本当に早速授業開始を宣言する。雄英の自由過ぎる校風が、早速牙を剥くようだ。

*

さて、牙を剥くといえは俺の精神にとても良くない時間が来た。

お着替えタイムである。

「女子少ないねー。全部で6人？」

「男女まとめてヒーローって言うくらいだから、まだまだ男社会か」

「女子更衣室がちゃんとあるだけマシですわ」

「えー？ 普通に着替えれない？ 別に減るもんじゃないし！」

「それを出来るのは小学生と透ちゃんだけだと思うの」

「梅雨ちゃん酷い!？」

ワイワイ言いながら無防備に着替えている彼女らに目を合わせないように、俺はそそくさと着替え始める。

小学校中学校の頃はまだ良かった。ロリコンでも何でもない俺の性欲を刺激される事は無かったから。

だが高校生はアカン。体が出来てきてフェロモンを放ち始めるお年頃だ。しかも平均値から圧倒的に上な子ばかりかかほんとにアカン。無理。今は亡き息子が息吹き返しそう。

てか発育の暴力さんが本気で暴力的過ぎる。形も整ってて尚大きいってどういう事だ。

「あ、麗日さんでしたわね。先程は挨拶が出来なくて申し訳ありませんでした。私は八百万百と申します」

俺の視線に気付いた八百万さんが無造作に近寄ってきて、手を差し出してくる。

着替え途中だったので、下着姿のままだ。

「よ、よろしく八百万さん。麗日お茶子デス」

視線を胸に落とさないよう自制心を振り絞ったせいで、出てきた言

葉がカタコトになった。

握手をする。手は見えない。目線を下げたらそれで終わりだ。墜ちちゃダメだ。どれだけ引力が強かろうと墜ちれば100%捕捉される。例えその瑞々しさ溢れる球体がどれほど魅力的だろうと、目線を落としては……！

「ケロケロ、はした端ないと思うよモモちゃん。ちゃんと着替えてから挨拶しない」と

「はっ！ 確かにそうでしたわ！ ごめんなさいね麗日さん！」

横槍が入り、八百万さんが急いで着替えを再開する。そのおかげで木星級の重力に引かれ大気圏に突入しそうだった視線を、どうにかスイングバイさせる事が出来た。

「初めまして麗日ちゃん。私は蛙吹梅雨。梅雨ちゃんって呼んで」

「ああ、初めまして梅雨ちゃん。こつちもお茶子ちゃんでもいいよ」

「ホント？ 分かったわお茶子ちゃん」

八百万さんに代わり挨拶してきたのは、蛙の個性を持つクラスの常識枠・梅雨ちゃんだった。こつちは既に着替え終えている。さすがにしっかりしているな常識枠。

「なにになー？ 自己紹介タイム？ アタシは芦戸三奈！」

「あ、なら私も私も！ 葉隠透だよ！ よろしく！」

梅雨ちゃんに挨拶していると、異形系元気女子二人組・芦戸さんに葉隠さんが輪に飛び込んできた。こういう感じのはだいぶ付き合いやすくて助かるなと思いつつ、「よろしく。芦戸さん、葉隠さん」と挨拶する。

「もー、他人行儀！ 三奈でいいよ！ でもお茶子って呼ばせて！」

「私も透でいいよお茶子ちゃん！」

「分かった。三奈に透ね」

そうそうこれで友達だね！、と角の生えた即席友人が笑う。幼稚園時代並の友達作りの速さだと、こつちも思わず笑ってしまった。

「あー、この流れで自分だけ紹介しないのもアレだね。ウチは耳郎響香。よろしく……えーとお茶子で良い？」

「いいよ。じゃあこつちも響香って呼ぶからよろしく」

それまで静かに着替えをしていた耳郎さ……響香とさらつと紹介をし合った。ロッキンガールはサバサバしてて、こちらも非常にやりやすい。

女子に馴染むというのは毎度大仕事だったが、今回は大丈夫そう。さすがヒーロー志望のコミュカといったところか。

そのままSNSのID交換しない？ と女子会が始まりそうな空気になった。しかし扉の外から響いた飯田の声が、空気を見事に霧散させる。

「女子の諸君！ 相澤先生が遅いと言っていらっしやる！ 少し急いだ方がいいと思うぞ！」

「あ、ヤバッ！ 委員長だ！ ハイハイ今行くー！」

「まだ委員長は決まってるよ三奈ちゃん」

梅雨ちゃんのツツコミも聞かずに、三奈が飛び出す。いきなり扉が開いたせいで、三奈と飯田が正面衝突しそうになった。

ぬおっ!? と叫びながらたたらを踏む飯田に、ごめーんと適当に謝り駆けていく三奈。この騒々しいのが日常になるかと苦笑しつつ、俺達もグラウンドへ向かった。

ちなみに余計な事は何もなかったもので、個性把握テストは原作通りに終わった。

*

不適格者の炙り出し。その目的で行われる個性把握テスト。

150人以上を退学にした相澤は、その目でもって新入生——特に緑谷出久と麗日お茶子を見張ったのだが……

結果から言うと埃は出なかった。

(個性を消したところで、何かしら動きがあると思っただけがな)

やはりマイクの妄想だったのか、それとも麗日の隠蔽能力が高かったのか。授業後に職員室で1—A生徒の評価をまとめながら、相澤は黙考する。

「よう、どうだったよ例の連中は」

「マイクか」

非合理的に時間を無駄にしていると、後ろからマイクがやってきた。相澤は飲みかけのウィダーを一気に吸い込んで、ゴミ箱に放る。「どうだったも何も、一例だけでは判断は保留するしかない。今日の所は尻尾は出さなかった」

「150人斬りの相澤でも即断罪とはいかなかったか。コイツは強敵だぜ」

「怪しい所はあったがな。麗日なんかは、俺が除籍チラつかせてもケロリとしていた」

そう、クラスの他の生徒が多少なりとも動揺して見せる中、麗日だけが予定通りとばかりに何の反応も見せなかった。自分は最下位にならないと確信している轟や爆豪ですらピクリと反応したのになだ。

「ただそれが知っていたせいで落ち着いていたのか、単に胆力が並外れているだけなのかは判断できん」

事前に相澤の事を知っていたならば、反応は薄くなるかもしれない。しかしそれは同時に相澤がしてきた事も知るといふ訳で、覚悟なりなんりの反応を見せて然るべきだろう。

百歩譲ってその場を凌いだとしても、緑谷にちよっかい掛けたタイミングで何かしらの反応を見せたはずだ。しかし麗日はやはり動きを見せなかった。サポートするのは入試までだったのか、相澤が処分しないと予知したのか。

マイクの妄想だと断ずるのが一番簡単だが。

「いつそマンダレイでも呼んだ方が良さそうだな」

相澤の考えを聞き、マイクが眉間を揉む。確かに“テレパス”という個性の字面は便利だろうと相澤は思った。だが、

「あいつ心の読み取りなんて出来たか？」

「そんな事出来たら今頃ピクシーボブの婚活に付き合わせてヒーロー活動なんて出来ないかハッハー！」

「今度会った時、記憶読まれて大変な事になるんだろうな。ご愁傷様」
「……おい、デタラメ言うんじゃないぞ相澤。おい、ホントは心読める

とか無いよな？　おい、何で目を逸らすんだおい」

*

初日がつつがなく終了した。結局ぶっ飛んでいた授業は個性把握テストぐらいで、後は普通の高校と同じような授業内容だった。

特筆する事もなく、後は帰って自主訓練をするくらいだが、今日はまだイベントが残っている。

「よー二人とも！　ちよつとストップ！」

前を歩く緑谷と飯田に声を掛ける。わざわざ女子達と別れて追っかけてきたのも、原作イベントを消化するためだ。

緑谷のヒーローネーム命名式である。

「君は∞女子」

飯田が素晴らしいネーミングセンスを發揮する。初対面では無いが挨拶もそこそこな人間に真正面からそう言える神経は……いや俺も緑谷を地味なモサモサと言っているし、この世界のデフォオかもしれない。

「麗日お茶子だ。飯田天哉君に緑谷デク君だったよな」

「デク!？」

俺の言葉に緑谷が大きく反応する。まあ悪口だからしようがない。

「あれ？　テストの時爆豪とかったのがデクてめー！　って言ってたからそうだと思っただけだ」

「あの……本名が出久で……デクはかつちゃんかバカにして……」

「ああそうなんだ。悪いな間違えて」

目も合わせず両手を左右に振る緑谷に、俺は謝った。飯田が顎に手を当てながら「蔑称か」なんて言っている。

さて、こつから俺が彼の名前を付けてやるんだが。

(深層意識さん深層意識さん)

(なんなん改まって)

(未だにデクに頑張れって意味を感じとれないんだがどうすればいい)

(知らんわ)

ここでお茶子がデクに頑張れって意味を与える。が、与える側の俺が何度考えても、頑張れって響きを感じる事が出来なかったのだ。

唯一思いついたコジツケは、

でくの坊って響き

←

でくの坊と言われる劣っている奴がなんか雄英で頑張ってる

←

頑張れって感じ

という爆豪に勝るとも劣らない上から目線から来た感覚ではなからうかと、

(私そんな酷い事思ってないよ!!)

(じゃあどうい風にデクが頑張れになったのか説明して貰えませんかねえ)

でないと悪意なく付けられた蔑称をヒーローネームにまでしてしまうのだ。それはあまりに忍びないではないか。

(そんなん言うならおっちゃんが好きなの勝手に付ければいいやん!)

(……ま、そうなる訳だが)

深層意識に言われるまでもなく分かっている。だが残念な事に、俺もさしてネーミングセンスがある訳ではないのだ。

下手すると常闇と同レベルの名前を付けてしまいかねない。真面目な緑谷にそれは酷だろう。

しようがない。不思議ちゃん扱いは今に始まった事じゃないしな。このまま進むか。

「でも「デク」って「頑張れ!」って感じで、なんか良いと思うぞ俺は」「デクです!」

「緑谷くん!!」

スピードを売りにする個性持ちなだけあって、飯田のツツコミは速

かった。

「浅いぞ！ 蔑称なんだろう!？」

「コペルニクスの転回……!？」

「自分で言っつといてあれだけど、いいのかそれ……」

思わず言っつてしまった俺に、「本当によく言えたね麗日くん」とばかりに飯田がきつい目線を飛ばしてくる。友達思いの良い奴だな。

「ま、何にせよよろしくな緑谷!？」

「!？」

「緑谷くんをこんなに感動させといて普通に呼ぶのか麗日くん!？」

飯田のツツコミに首を傾げてやる。

「え、だって蔑称だし名前呼びするのもまだあれだし?？」

「だ、だよね〜！ 緑谷でいいよ! ……はあ」

「これ以上なく正論だが鬼だ……! 鬼がいる……!？」

緑谷と飯田が震えているが、俺は無視した。

原作通りに進むにしても、フラグは徹底的に折っていく。悪いな緑谷、この体を野郎に渡す訳にはいかんのだ。

（え〜、別に好きにさせてもいいんじゃない?）

（表出れないからって発酵してるんじゃないやねえぞマセガキが）

しよぼくれる緑谷に慰める飯田。その背を見ながら、俺はにやけ顔の深層意識に鉄拳を叩き込む妄想に耽っていった。

第5話 ヒーロー基礎学：戦闘訓練

「わーたーしーがー!!」

ガラスと開かれる扉、一步踏み出すだけで変わる空気、教室から溢れんばかりの期待。

「普通にドアからきた!!!」

H A H A H Aとアメリカンな笑い声を上げながら、オールマイトがやってきた。

本当に先生やってたんだとか、なんちやら時代のコスチュームだとかでクラス中が沸いている。目の当たりにしてみると、本当に人気があるんだってのが分かる。

まあ無理もない。別にファンでもなんでもない俺ですら、その存在感到に圧倒されているんだから。

オールマイト。平和の象徴。

彼という存在は、そう名乗るに値する本物なのだろう。言葉ではなくて理解させられた。抑止力というのも伊達ではない。

「ヒーロー基礎学！ ヒーローの素地をつくる為、様々な訓練を行う課目だ！ 早速だが今日はコレ！ 戦闘訓練！」

と、生ける伝説が早速切り出した。既に臨界点に達していたクラスが沸騰し、配られたコスチュームに身を包んで我先にと飛び出して行く。

キラキラと希望に満ち溢れた彼らを見て、オールマイトも「さあ！ 始めようか有精卵共!!」と激を飛ばした。殻を破り、現実というにどうしようもない物にまみれていない可能性の塊を相手にして、思わず言ってしまったのだろう。気持ちは分かる。

うんうんと頷いている俺の肩を誰かが叩いた。

「麗日少女。落ち着いていないで君も早くグラウンドに行くんだ」

「おっとすんませんっした!」

ドアアップになったオールマイトに言われ、俺は慌てて皆を追いかけだした。

*

戦闘訓練。混迷極めるこの時代にピッタリのアグレッシブな授業だ。

今回の授業で緑谷と爆豪が拳を交え、ライバルになる道を進む。メイデイツシユは彼らだけで、俺ことお茶子と飯田はその添え物だ。別に原作を引つ掻き回すつもりはないから、外から核保存庫に飛び上がって呐喊どっかんしたりする気も無い。緑谷は存分に爆豪と因縁対決をするといいだろう。

それにしても、

「お茶子、結構攻めてるね！」

遅れてきた俺に、三奈がそう言ってくる。つられて何人かこちらを見てきた。

緑谷と峰田、お前らの目はキモいからこっち見んな。まあ気持ちは分からなくも無いが。

何しろ今着ているのは、色々原作と違う要望を入れたはずのほぼ原作通りの形になっているパツツンスーツだ。健康な男子に見るなというのは酷だろう。

男子に理解のある俺は奴らの目線を諦めて、三奈の方を向いた。

「そういう三奈こそいい格好してんじゃん」

「ホント？　ありがとう！」

三奈は素直に喜ぶ。正直大阪のおばちゃんがプロレスラーになったみたいなおコスとか思わなくもないが、異形系の感性はまた常人と違うのだろう多分。そこは指摘しないが吉だ。

「それに攻めているといえ、あの二人には敵わんし」

「うん？　ああ確かに！」

俺の視線の先を見た三奈が納得する。

そこにいたのは八百万さんと透だ。八百万さんはその豊満ボディを惜しげなく見せるスタイルで、透は手袋とブーツしか付けない公然わいせつスタイルだ。昨日裸を見せるくらいと言っていたが、マジでやるんだなあと驚くしかない。

俺が文化がちがう！　と思っっているうちに、オールマイトが説明を始めた。原作通りの班に分かれ、戦う時が来たようだ。

トップバッターは勿論俺達。訓練場の建物に消えていく爆豪達を尻目に、俺と緑谷は突入準備を進める。

「見取り図覚ええないとな。実際の現場でそんな事出来るかは別にし……おい大丈夫かよ」

何気なく見ると緑谷が生まれたたての子鹿のように震えていた。爆豪の相手をするのが余程怖いらしい。

「うん……相手がかつちゃんだから……ちよつと身構えちやつて」

「まあ爆発物振り回すガキ相手するとか怖いよな普通に。そういや俺も怖い」

「ハハハ……でもかつちゃんはまだ怖いだけじゃなくて、凄い奴でもあるんだ。だから、負けたくないなって」

「……そうか。じゃあ今のは武者震いだな」

「……そうだね。そうだ。僕はこの時を……つてゴメン！　麗日さんには関係ないのに！」

「そんなん気にすんなってコンビなんだから。存分に戦ってこい」
「うん！」

緑谷が勢い良く頷く。俺も頷く。これで怖い奴は緑谷に押し付ける事が出来た。俺は飯田と適当に遊んでいよう。

知らず知らずのうちに役割分担をした後、俺達はビルの中に突入した。中はコンクリが剥き出しになっていて、当たり前だが生活感など欠片も無い。

サバゲやつてた時のように壁に張り付いて進みたくなったが、緑谷がズカズカ進むので俺も合わせて真ん中を通る。戦争後遺症じゃないが、非常に落ち着かない気分だ。

爆豪が飛び出してきたのは、壁際に張り付きたい欲が最高潮に達する直前だった。

爆音がヘルメットを揺らす。着ているコスのように手榴弾くらいの爆発を起こしたらしい。

てかあれもしかしくなくてもコンカッションングレネード衝撃型手榴弾くらいの威力あるよな。

破片手榴弾フラッググレネードほど殺傷範囲は無いとはいええ、半径2mはキルゾーンだろあれ。

緑谷が庇ってくれたおかげで直撃はしてないが、耐爆機能有りのスーツ来てる俺と違って、緑谷のそれは単なる布だ。普通の神経をしているのなら、一目散に逃げるべきだろう。

残念な事に、彼は普通じゃないが。

「おい避けてるんじゃないやねえよクソデク」

そう言いながらゆらりと体勢を立て直す爆豪に、緑谷はしっかりと対峙する。その様子がまた気に食わないようで、爆豪は青筋を浮かべながら殴りかかってきた。

右の大振り。緑谷はその内側に身を滑らせる。出っ張りの多いコスに手を掛けると、爆豪相手に思い切り背負投げを決めた。

路上で柔道はマジでヤバイ。下手しなくても背骨が折れる可能性がある。爆豪が爆豪なら緑谷もしっかり相手を殺す気にいるという事だ。

ふう、ふうと息を整えながら、緑谷がこれまでの因縁を語る。爆豪が何故投げ飛ばされたのか、その因果を語る。

そして、

「僕は……いつまでも出来損ないのデクじゃないぞ……「頑張れ!!」って感じのデクだ!」

そう宣言した。これまでの呪いを跳ね除けるように。

まあそういう意味で呼んであげる人、いないんだけどね。

そう思うととてもじゃないが緑谷と目が合わせられなくなった。いや、悪いとは思うがうん。

「……そういうところがよお……ムカツクんだよなあああ!!」

爆豪が派手に爆炎を上げながら仕掛ける。緑谷が「麗日さん行って!」と叫んだので、後はもう任せよう。漢の世界に入るのはご法度だ。存分に殴り合うと良い。

核爆弾を探してフロアを上がる。もう少し時間が掛かると思ったが、5階で核爆弾と飯田を発見した。

林立する柱の影に隠れて、さて緑谷を待ってやるべきかとっかん吶喊するべ

きかと迷っていると、飯田がブツブツ何かを言い出し、

「俺はあ……至極悪いぞおお」

とかいきなり言い出した。

うん、原作で知ってるし、それで笑って減点される事も覚えている。覚えてはいるが……

無理。

「ブフツッ！ それあかんやつやー！」

クラスメイトのアホな姿に思わず突っ込んでしまう。天然モノはこれだからタチが悪い。こつちに気付いた飯田は同じテンションのままぬかったとか言ってくるし、青山では無いがもう腹痛で死にそうだ。

さて、

「さー笑うだけ笑ったし、お手合わせ願おうじゃないか。飯田君よお」
「う、麗日くん。出会った時から思っていたが、外見と言動が見事に一致しないね君は」

「まあヒーローだしキャラ付けて奴だ、ぞっ！」

「っ!? させないっ！」

言い終わる前に、俺は核爆弾に向かって走り出した。飯田はそれを遮るように身を滑りこまる。体格差を活かして押さえ込むつもりのようなのだ。

だが、そいつは悪手だ。

「俺対策でフロア全部の物を片付けたって？」

「っ、しまっ!?!」

覆い被さってきた飯田の顎に、下から掌底を叩き込む。同時に五指で触れ、飯田を無重量化。床から足が離れた所で、その脇腹に思い切りミドルキックを食い込ませた。

「ぬおおおっ!?!」

重力という支えを失っている飯田が、勢い良く飛んでいく。壁にぶつかり跳ね返されて、またぞろ宙を漂流し始める。

「でも自分を片付けてないのは片手落ちだよなあ？」

マスクに隠れて分からないが、今頃唇でも噛んでいるのだろう。と

もかくこれで飯田は無力化した。後は核に触るだけ……

ズシンと建物全体が揺れる。爆豪が大爆発を起こしたようだ。本気で大威力だったみたいで、思わず足がふらついた。緑谷はよく凄いだよなこの爆発。

「させ、ない……っ！」

「うおっ!？」

改めて核爆弾にタッチしようとした俺の目の前を、猛スピードで飯田が回転していった。伸ばした手を引っ込めなかったら、最低でも折れてただろう。

「……無茶するなあ飯田。熱血系はこれだから怖い」

足のエンジンを使い、無理矢理姿勢制御をしたようだ。そういえばそんな事を委員長決めでやってたなと思いつき出し、俺は小さく舌打ちする。

高速回転しながらも何とか壁に着地した飯田は、また漂い始める前に力強く壁を蹴った。

「怖がらせるのが今の俺の役割だ。簡単にやられると思うなよヒーロー!」

「上等だ。遊んでやるよ」

どっちがヴィランだと思える言葉を吐きつつ、飛んでくる飯田を迎撃する。スピードを活かしての低空からのタックル。膝を合わせるのは簡単だが向こうもそれは警戒するはず。

なら、

「ぬおっ!？」

両手を合わせて無重量化解除。飯田の体が地面に引かれる。目論見を外された飯田がエンジン始動。サマーソルトキックと紛うばかりの蹴りを繰り返した。

喰らえばヤバイ。だがタイミングが早い。飯田の足先を少し身を引くだけで避け、がら空きになった背中に思い切り前蹴りを叩き込んだ。

「ぐっ!!」

顔面から床に突っ込む飯田。だが腐ってもヒーロー志願者。叩き

つけられた反動を使い、跳ぶように体勢を立て直す。

追撃する事は出来ただろう。そこで訓練終了にする事も。だがそれじゃあ折角の授業が勿体ない。

「正直に言う。どうやら君を侮っていたようだ。だがここからはそうはいかないぞ」

飯田の方も格闘戦が出来るように構えている。向こうもやる気になったようだし、遠慮なく胸を借りるとしよう。

「そうかい。ならコスチュームのテストするから付き合え」

腰のホルスターに手を伸ばす。グリップを握る。抜く。構える。引き金を引く。

爆豪のものに比べてだいぶ控えめな爆発が俺の手の中で起きた。マスクを被っているのに「えっ?」という表情を上手く表している飯田に向けて、弾丸がまつすぐ飛んでいく。

「うおおおおおっ!」

あと0.1秒でも再起動が遅ければ、その心臓に弾は吸い込まれていただろう。だがすんでの所で身を捻り、飯田は俺の攻撃を避ける事が出来た。

「はあ……はあ……う、麗日くん!! なんでそんな物騒な物を持っているんだ!」

「ん? 銃くらい普通だろ? コスチュームの装備品欄に書いて支給されるくらいだし。それにこれ暴徒鎮圧用のゴム弾だぜ」

そう言いながら、俺は手に持つグロック似の角張ったハンドガンをヒラヒラさせた。スナイプのように実弾じゃないだけ有情である。

それにしてもここまで簡単に避けられるとは思っていなかった。抜き撃ち練習なんかは一応モデルガンの方でもやってはいたが、やはり実銃となると勝手が違う。出来るならばそれこそスナイプ先生に扱い方を習いたい所だ。

そんな風に今後の方針を考えると、息を整えていた飯田が盛大に息を吐いた。

「はあ……まあいい。銃を持つのが当たらなければいいだけだしな」

「お、強気発言」

「これでも速さに関してには自信がある」

「だろ。うな。そいじや的役頼んます」

発言と同時に二発目を撃つ。射線は合わせていたが飯田はいない。エンジンを掛けて俺の後ろに回り込み、蹴り入れようとしてくる。

振り向かない。脇から背中に牽制射撃。それから振り向き本射撃。

飯田はそれも避けたが、攻撃のタイミングは逸した。

何度か同じ攻防を繰り返す。狙いは付けられるが弾が届く前に避けられる。弾速が光速ならいいのになど苦笑していると、ハンドガンの弾が尽きた。

チャンスと思つた飯田が突っ込んでくる。エンジンで勢いを付けてのハイキック。後ろには避けられない、前進。マガジンをリリース。しゃがむ。頭上を足が通過。マガジンをリロード。銃身マスルを軸足に押し付ける。撃つ。

「ちいっ!!」

マズルフラッシュほとぼしが迸る前に、飯田が足を爆発させた。排気口から噴煙を上げ、バク転の要領で距離を取る。勢いがあり過ぎたせいで、飯田は部屋の反対側に着くまで回転を止める事は無かった。

ようやく止まった対戦相手に、俺は呆れと賞賛の言葉を送った。

「避けられるとは思わなかったぜ」

「……だろ。うな。俺も切り札使わなければ無理だつたと思う。ここで切るつもりは無かつたんだが」

悔しげに俯いてから、だが！ と飯田は指を突きつけてきた。

「悪いが相手が出るのは後数秒だ。今から手加減は出来ないぞ」

「上等、つと言いたいとこだつたんだが、残念。こつちが先に時間切れだ」

「何っ!?!」

一々大げさに驚いてくれる飯田に向けて、意味ありげな笑みを浮かべてやる。それをハツタリと判断した飯田が、今までと比べものにならないスピードで突進してきた。

『行くぞ麗日さんー!』

「おう」

緑谷の声がヘッドセットから漏れる。直後に振動。床が割れ、破片が大量に浮き上がる。

「飯田、悪いな。即興必殺!」

崩れた柱を掴む。身長の3倍はあるバットを思い切り構えそして、「彗星ホームラン!」

振り抜いた。

滞空していた破片がまとめて吹き飛ぶ。「ホームランではないかあああああ!!?」とツツコミ精神忘れぬ飯田に、瓦礫が雨霰あめあられと降り注ぐ。

その隙に彼を飛び越え、俺は核にタッチした。

悔しがる飯田を尻目に『ヒーローチームWIIIIIIIIIIIIIN

!!!』とオールマイトの声が響く。

こうして最初の戦闘訓練は、俺と緑谷の勝利に終わった。